

文化

震災で変わる若者の人生観、幸福度

京都大こころの未来
研究センター准教授

内田由紀子

フォーラム京



震災から半年、被災地で黙とうする学生ボランティアたち。若者の人生観に、震災は少なからず影響を与えている(11日、宮城県気仙沼市)



うちだ ゆき 1975年生まれ。京都大学大学院人間・環境学系研究科博士課程修了。専門は社会心理学、文化心理学。共著に「メンタルヘルスへのアプローチ」。

家族、地域との結びつき重視

東日本大震災の心理的影響は、被災者だけでなく日本全土の人々に及ぶものだった。筆者と内閣府経済社会総合研究所が20~30歳代の若年層の人生観や幸福度について、震災の前と後にインターネットでアンケートを行ったところ、被災地以外の若者の約半数が価値観の変化や広い意味での幸福感の変化などを経験していることが明らかになった。

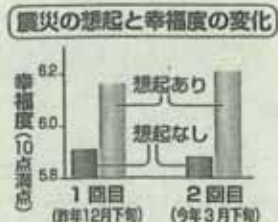
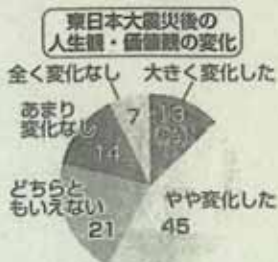
調査に協力した1方1884人のうち、被災地外に住む人は1万740人。その6割近くが、震災後、自分の価値観に何らかの変化があったと答えた。具体的には、家族や地域との関わり的重要性を再認識し、これまでの日常を再評価する傾向が強まっていた。

悲しみに共感

ある程度以上「思い浮かべた」と回答した人は約40%、全く、もしくはあまり「思い浮かべなかった」人は約48%と、ほぼ拮抗した。ただし震災を思い浮かべたグループは、思い浮かべなかったグループ

よりも震災前から幸福度が高く、わずかながら震災後にさらに高まっていた。それに比べ、思い浮かべなかったグループの幸福度は、統計的には震災前と後であまり変化していなかった。震災を思い浮かべたグループは、そうでないグループよりも悲しみなどのネガティブな感情を強く経験していた。彼らは被災者の悲しみに共感した結果、自分の置かれた現状を見直し、幸福の「基準」が変わったと考えられる。家族や仕事など、身の周りの環境はかけがえのない、十分満足できないものだと感謝するようになった。

若年層の生活行動及び幸福度に対する影響調査。内閣府経済社会総合研究所が全国の20~30歳代を対象に、昨年12月と今年3月下旬(東日本大震災の被災地は5月)、インターネットでアンケートを実施。同一人物が2度回答する方式で、1方1884人から有効回答を得た。震災前後の心理的变化を追跡し、その影響を生活行動、人生観、幸福度の3点から明らかにするのが主な目的。被災地以外のデータの一部は内閣府「幸福度に関する研究会」のホームページで公開されている。



ともに内閣府経済社会総合研究所「若年層の幸福度に関する調査」より作成

会に浸透する個人主義的システムと無縁ではないと思われる。自分のことだけで精いっぱい周囲に目を向けることができないうと、家族や地域での人間関係の再構築を図るとうとする幸福度の高い層との「二極化」がさらに広がっていくのかどうかは、今後の社会システムと、こころの問題の相互作用についてしっかり

になったといふことなら

個人主義と二極化か

そうした不

幸せ感・孤立感、現代社

会に浸透する個人主義的

と議論を深められるかにかかっている。

今回の調査には、被災地に住む若者1144人(うち約15%が床上浸水以上の被災者)からも有効回答があった。人生観の変化については、被災地外のデータと変わらず、やはり半数以上の若者に家族や地域との結びつきを重視する傾向がみられた。

しかし、被災県での幸福度の変化と震災の想起との関係は、被災地外とは正反対のパターンを示した。幸福度の判断の際、

震災を思い浮かべたグループの幸福感は震災後に下がり、思い浮かべなかつたグループは震災前の幸福度は低かつたものの、震災後にはむしろ上がった。ネットにアクセスできる人たちだけの回

答ではあるが、こうした結果の背景に何があるのか、今後詳しい分析が必要だ。

いずれにせよ、震災がもたらした心理的影響や生活の変化は、被災地とそれ以外の地域では大きく異なっている。その現実を受け入れた上で、どのように日本の復興の未来図を描いていくのが、今後の課題となる。